

## 詩篇119篇 9～16節

- 9 どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。
- 10 私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。
- 11 あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。
- 12 主よ。あなたは、ほむべき方。あなたのおきてを私に教えてください。
- 13 私は、このくちびるで、あなたの御口の決めたことをことごとく語り告げます。
- 14 私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでいきます。
- 15 私は、あなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。
- 16 私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。

בְּמָה יִזְכֶּה נַעַר אֶת־אֲרָחוּ לְשֹׁמֵר כְּדִבְרֶיךָ׃  
 בְּכָל־לִבִּי דַרְשֵׁתִיךָ אֶל־תִּשְׁגָּנִי מִמִּצְוֹתֶיךָ׃  
 בְּלִבִּי צָפַנְתִּי אִמְרֹתֶיךָ לְמַעַן לֹא אֶחָטְא־לָךְ׃  
 בָּרוּךְ אַתָּה יְהוָה לְמַדְנִי תְהִיךָ׃  
 בִּשְׁפָתַי סִפְרֹתַי כָּל מִשְׁפָּטֶי־פִיךָ׃  
 בְּדַרְךָ עֲדוֹתֶיךָ שִׁשְׁתִּי כָעַל כָּל־הָוּן׃  
 בְּפִקְדוֹתֶיךָ אֲשִׁיחָה וְאֶבִּיטָה אֶרְחֹתֶיךָ׃  
 בְּחֻקֹּתֶיךָ אֲשַׁמְעֵשֶׂע לֹא אֲשַׁכַּח דְּבָרֶיךָ׃

二番目のヘブル語アルファベット「ベース」編です。すべての節の冒頭に出てくるこの文字は、基本的に「～中に」を意味する前置詞で、12節の「בָּרוּךְ／バールーフ」（祝福された者＝ほむべき方）以外すべてその役割を果たしています。

- 9 節：「בְּמָה／バンメー」（どのようにして／wherein）
- 10 節：「בְּכָל／ベコール」（すべてにおいて＝心を尽くして）
- 11 節：「בְּלִבִּי／ベリビー」（私の心に）
- 13 節：「בִּשְׁפָתַי／ビセファータイ」（私のくちびるで）
- 14 節：「בְּדַרְךָ／ベデレフ」（道に）
- 15 節：「בְּפִקְדוֹתֶיךָ／ベフィクデイファー」（あなたの戒めに）
- 16 節：「בְּחֻקֹּתֶיךָ／ベフコテイハー」（あなたのおきてに）

さて、9節は「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか」という「祈り」で始まります。ここで言う「若者」とは、おそらく若者全般を念頭に置きつつも詩人自身を指しているのでしょう。自分が如何に「きよい道」から外れやすい存在であるかを自覚していたのです。若かりし日々を振り返りますと、まっしぐらに物事に取り組んでいこうとする気炎があり、すべてにおいて伸び盛りであり、恐れ知らずの時期でありました。しかし、それとは裏腹に、無思慮、誘惑、経験不足といった危機と常に背中合わせだったことも思い出されます。私の場合は特に、自分のアイデンティティが不確立であるがゆえの不安に苛まれていました。また、この時期は男女共に罪に陥りやすく、貞操を簡単に放棄してしまう可能性があります。この詩人は、律法のことばによって守られながらも、内心誘惑と戦いながら、幾度も打ち破られそうになる苦しみと葛藤していたのでしょう。その度に彼が行なっていたことが挙げ連ねられています。

- ・ 心を尽くして主を尋ね求めた (10 節)
- ・ 主のことばを心に蓄えた (11 節)
- ・ 主の教えを乞うた (12 節)
- ・ 主の御口の決めたことをことごとく語り告げた (13 節)
- ・ 主のさとしの道を楽しんだ (14 節)
- ・ 主の戒めの思いを潜めた (15 節)
- ・ 主の道に目を留めた (15 節)
- ・ 主のおきてを喜びとした (16 節)

彼の行動の動機は常に「主の御言葉 (律法)」であったことが分かります。ここでも「律法」を意味する表現が散りばめられています。

- ・ **あなたのことば** (9 節、11 節、16 節)
- ・ **あなたの仰せ** (10 節)
- ・ **あなたのおきて** (12 節、16 節)
- ・ **あなたの御口の決めたこと** (13 節)
- ・ **あなたのさとし** (14 節)
- ・ **あなたの戒め** (15 節)
- ・ **あなたの道** (15 節)

罪を犯しやすいのは若者だけではありません。罪の種類は人生の各時期によって変化するものです。汚れから身を守らなくてはならない時期、金銭的罪に陥りやすい時期、見栄を張りたくなる時期、名誉に溺れやすい時期、高慢になりやすい時期……。複数の罪が重なり合うこともあります。それゆえに、人生のどのページを開くにあたって主の御言葉を心の中心に置き続ける必要があるのです。